

# 未来のカタストロフを示す教育者の方法

——社会科の一課題からアンダースとドゥルーズの哲学へ——

瑞慶覧 洸 太

## はじめに

平成29・30年学習指導要領改訂を受けて、近年では探究的な学習が強調されるようになった。そこで生徒は主体的に取り組むことが、そして教師はそれを支援することが求められている。生徒は地域や世界、あるいはある集団や身近なところに課題（以下、本稿では「社会課題」と統一する）を見出し、学習を通して主体的・能動的に関わることが目指されるようになった。その際に諸々の「社会課題」は教材として取り上げられ、生徒は何らかの解を出そうと取り組む。この取り組み方や動向は学校教育の全体を通して行われるが、そのなかでも以前から取り組んできた教科に社会科を挙げることは概ね理解を得られるだろう。社会科は来るべき市民の育成に向けて諸課題を理解し、取り組むことを教科の目的やプロセスに置いており、近年の社会科学研究動向でも「社会課題」を教科学習の対象としている。本稿では、その個々の実践に分け入って論じていくことはできないが、社会科の教育研究・実践が「社会課題」の学習を重要なものと位置付けていると指摘することはできるだろう。

だが、こうした「社会課題」を扱う場面で、教師（あるいは教科書など）の伝達はスムーズにいくとは限らない。あとで整理するように、とくに社会科では「社会課題」などの教材のリアリティを追求するなど、苦勞が伺える。たとえば小学校社会科を専門とする教師と、そうでない教師に聞き取り調査をした大澤克美（2011）の分析では、「教職経験を重ねるに伴い社会科を研究教科とする教員が、体験活動などによるリアリティの有無から難しさを判断している」（大澤 2011：49）ことが指摘されており、伝えるための工夫に腐心していることが伺える。この一例を取ってみても、「社会課題」は伝え難く、ともすれば遠い出来事とされかねない。社会科を中心とする教科学習にとって、それは教育学的な重要

論点となっているといえよう。

本稿は主に社会科を念頭に、この困難に対して「社会課題」を知らせるだけでは不十分である点に着目する。そして「社会課題」が示す「遠い出来事」を知ることから受け止めることへの転換、あるいは信じることを可能にする方途を考察する。そこで、3人の哲学者の議論を借りてアプローチを試みる。本稿の見立てでは、いずれも「未来の出来事をいかに捉え、表現するか」という課題に取り組んでおり、「遠い出来事」を扱う社会科にも示唆を与えうると考える。この論点を考察するために、まずドイツの哲学者ギュンター・アンダース（Günther Anders, 1902-1992）の寓話に着目する。寓話の特徴を端的に示せば、「破局の予言を真に受けていなかった人々が、信じるようになる物語」である。あとで整理するように、この寓話には「伝わらなさ」（あるいは信じられなさ）をめぐるアンダース自身の格闘が反映されており、本稿が念頭に置く社会科の課題とも共鳴しうる。この寓話はフランスの哲学者ジャン＝ピエール・デュピュイ（Jean-Pierre Dupuy, 1941-）によって広く知られるようになったが、その結末場面には本稿の課題への一つの示唆が含まれていると考える。本稿ではデュピュイの解釈を手掛かりにしつつも、そこから更に、未来を捉え表現する振る舞いについて示唆を得るべく、ジル・ドゥルーズ（Gilles Deleuze, 1925-1995）の議論へと架橋する。彼らの未来への思索を頼りに、本稿は次の手順で考察を進める。

まず、社会科の動向と課題を整理し、その過程でアンダースの問題関心を示しながら本論への接続を図る（第1節）。次に、アンダースの寓話を確認し、この寓話を有名にしたデュピュイの解釈を整理する（第2節）。さらに、寓話に登場する「前未来的な予言」が持つ、未来を到来させる効果とその表現技法を考察するために、ドゥルーズの議論を参考に寓話を再解釈する（第3節と第4節）。ドゥルーズ

の時間論には僅かなアンダースへの言及がみられるが、それほど知られてはいない (cf. 渡名喜 2013)。この交点を踏まえながら、未来を捉えた者がそれをどう示すのかについて議論を深めていく。最後に、本論を整理しつつ、「社会課題」の伝わらなさに対して、教育者がどのように振舞い、その先の未来を示しうるかの示唆を得る (おわりに)。

## 第1節 先行研究及び課題の整理

本節では、冒頭で示した社会科の動向を整理し、そこから引き出される課題を示す。その上で、本稿が着目するアンダースの問題関心と重なる点を指摘する。

### (1) 社会科における「社会課題」学習の動向と課題

近年の探究学習に特徴付けられるように、「社会課題」へ接近し、取り組むことが多くの教科で目指されるようになった。本稿が念頭に置く社会科でも、「社会課題」を教材とした学習や探究活動が実践されている。宮本英征 (2024) は、2023年度 of 社会科教育研究の動向として「社会課題学習を研究対象としている」点を挙げ、「実際に研究論文に示された社会問題学習は、社会問題とその構造を理解する学習ではなく、社会問題の当事者として解決策を検討・判断したり対話・議論したりする学習になっている」(宮本 2024: 95) と指摘する。ここから、「社会課題」を通した学習によって、課題の「当事者」として参画することが社会科 (研究) で取り組まれていると概括できるだろう。

しかし、教材としての「社会課題」の学習において、「当事者として解決策を検討・判断したり対話・議論したりする」ことが容易かどうかは議論の余地がある。例えば、社会科を構成する科目「公共」では、扱われる情報や「社会課題」の多さが指摘される。和田悠 (2023) の分析によれば、教科書には多くの社会課題やそれを分析する原理が提示されている。だが、示される原理などのヒントは考える手助けになるのなら良いが、その多さなどから「当てはめ学習に陥ってしまう危険性が高い」(和田 2023: 92) ことを指摘する。そのため、「授業で論争的な課題が提示されたとしても、考えるべきポイントやそれに見合った資料や概念が十分に授業や教科書に

提示されていれば、結局のところ生徒はそれらを用いて、教師や教科書が期待するような回答をきれいに導き出すだけではないだろうか」(和田 2023: 93) と危惧を示す。つまり、多くの「社会課題」に取り組むことが求められ、その多様さへの配慮として模範的な解が示されることで、かえって単なる情報へ矮小化する恐れが付き纏う。

上記の困難に対しては、内容の精選がしばしば提案される。実際に、和田は「真面目な教師であればあるほど、教科書の内容を網羅的に扱う欲望にかられがちである。しかしながら、生徒に社会的課題を考える時間的・精神的余裕を作るには、授業で取り上げる社会的な諸課題を精選する必要がある」(和田 2023: 93) と述べる。むろん、探究的な学習が重視される今日では、生徒自身が関心に応じて課題を見出し、学習課題に据えることで積極的な関わりが期待できるため、生徒が一つの課題にじっくり向き合えるようにする意義はある。一方で、社会科などの学習では、自分の尺度で計れない「社会課題」にも取り組むことが求められる。では、社会課題=内容を精選したからといって、生徒が受容できるのだろうか。

むしろ、課題自体とそれに関わる人間のあり方が、伝達と受容を困難にしているのではないか。多くの「社会課題」は時間的・空間的、あるいは規模の面で個人の範疇を超えており、リアリティの有無よりも解決し難い。例えば、過去の戦争や未来の災害、人口問題などを教材とする際、生徒のスケールを超えてしまい、十分に引き受けることが難しい。そのため、教育者が重要だと考え、精選して扱ったとしても、学習者は自分が受け止められる範疇でしか受容できない。「社会課題」の多様性に加え、そのスケールの違いが理解 (受容) に困難を生じさせる。その結果、知識として得られても部分的な理解に留まることや、単なる情報として処理され実感を伴わないまま終わる可能性がある。

本稿が焦点を当てるのは、「社会課題」に向き合う教育では、課題の緊迫感が高い一方で、生徒の受け止めが鈍いという問題である。こうして教育者は伝えたいと願いつつも、伝わり損ねるという捻じれた状況に直面することになる。この問題は、単にリアリティを再現するだけでは克服できない。「リアリティの有無」を問う際に、多くは、その出来事それ自体をモデルとして再現することや、あるいは本

物の出来事にどれほど似せること／同一のものを示すことができるかという発想があるのではないか。似せることや同一のものを再来させることは、学習者に出来事自体を経験させる点で伝わりやすいと思われるかもしれない。だが、先述したような多様さやスケールの問題は、似せたところでお、「伝わらなさ」を突き付けるのだ。ならば、伝える方法はそれ以外にはないのか。単に同じものを再現するのではないのなら、教育者はどのように表現することができるのか。出来事と「伝わらなさ」に対する教育者の応答の仕方が問われている。

## (2) 〈伝わらなさ〉とアンダースの「プロメテウスの落差」

ここでは、次節で確認するアンダースの寓話の特徴を見通しやすくするために、彼が対峙していた核の問題をめぐる議論を概観する。その上で、「伝わらなさ」の問題が過去だけでなく、現在と未来に跨る点を指摘しておきたい。

先行研究が示すように、アンダースの20世紀への洞察は、人間と「労働、巨大機械と技術についての考察を再び呼び起こす」(Figuier & Mongin 2003 : 125)ものである。特に「「ヒロシマ」以降の「原子力時代」の「人間の地位」なるものを批判的に明らかにするという哲学的—あるいは「哲学的人間学」的な一視座」(渡名喜 2016 : 97)が特徴である。そのため、ときにアンダースは「災害と厄災の文化的記憶論者」(山名 2017 : 120)として、進歩や発展にさえ懐疑的な目を向ける思想家として描かれる。

アンダースの思考において、核という兵器・技術の問題が重要な位置を占めていることは言を俟たない。「ヒロシマ・ナガサキ」の出来事だけでなく、第五福竜丸にも言及する彼にとってこの問題は、終わりなどない脅威であり、警鐘を鳴らし続けた。私たちは戦争や核の恐ろしさや愚かさを知っているが、それ「だけ」なのではないか。そこで繰り返し言及されるのが、「プロメテウスの落差」と「アポカリプス不感症」である。

アンダースの目には、20世紀は、人間が自ら生み出したものに遅れをとっている現象が広がりつつあると映っていた。彼は、人間がいわゆる進歩によって様々なものを生み出してきたが、それは「時間的存在である自分自身を混乱させ、自ら計画し生産したものに遅れた者」として、「うろつきまわってい

るだけだ」(Anders 1985 : 16=1994上 : 16-17)とみなす。こうした光景を彼は、「プロメテウスの落差」と呼んで、次のような見立てを述べている。

言い方を変えて生産者のパースペクティヴから言えば、生産物を製造しているわれわれが歩調を合わせられない世界、それを「把握する」にはわれわれの想像や情緒や責任能力、把握力の絶対に手の届かない世界を打ち立てようとしていることは、ありえないことではない。そういう世界を、われわれはもうすでに作り出してしまっているのかもしれないのだ。(Anders 1985 : 17-18=1994上 : 18)

産業社会を眼差すこの指摘は、多くの科学技術やその生産物にも及ぶが、ここでは核をめぐる議論として考えよう。例えばアンダースは第五福竜丸を念頭に置き、核という技術的産物は、あまりにも大きすぎると問題視している。仮に実験として行うリハーサルだとしても、その影響は広範囲に及び、本番と区別はつかなくなる。その強力すぎる産物の前では誰も区別されず、脅威に曝されているのだ。

しかし、この産物があまりにも巨大であり、その影響は後にも及ぶため、人間の想像力が追いつけない。アンダースは、この「プロメテウスの落差」を根源として、人々がその巨大な恐怖を感じることに失敗していると指摘する。

核戦争がどんな結果をもたらすのかを、われわれが「知っている」のは疑いない。だがそれは「知っている」だけだ。[……]とりわけ、われわれが「知っている、知っている」と叫ぶのは、これ以上さらに知らねばならないという途方もないことを免れるためであり、いわゆる知識というアリバイに守られて再び無知へ戻ることができるためである。(Anders 1985 : 269=1994上 : 282-283)

ここでアンダースが問題視するのは、人間が自らの生産物が構成する世界に遅れをとり、想像力が及ばなくなっている点である。それなのに、「知っている」というだけで満足し、「理解」から遠ざかる現状を鋭く批判している。アンダースはこの困難に警鐘を鳴らし続けたこともあり、実際に原爆の被

害を受けた日本に訪れた際にも忘却の恐れがあることに強い不安（不満）を抱いた<sup>1)</sup>。だからこそ、彼はこの困難を問い続け、格闘したのだ。

ところで、これまでに確認したアンダースの問題意識は、本節前半で整理した社会科に伏在する問題とも重なってくる。今日、より多くの生産物が社会で生まれ互いに結びつき、巨大なネットワークを広げる中で「社会課題」は生じている。その行く末を想像することは難しく、そのために未来にまで及んでいる「社会課題」を学習者が受け取り難くなっているのではないか。直接に落差の問題は言及されないが、今日の「社会課題」へと向き合うことが奨励されるなかで、教育はこの落差と正面から向き合い、いかに想像力を惹き起させるかが問われているのではないか。アンダースの格闘した問題の状況は現代にも重要な論点を提示している。では、この課題に対するアンダースのアイディアとは何か。それは寓話である。次節では、そのアイディアを追ってみよう。

## 第2節 アンダースの寓話とその解釈

本節では、アンダースの寓話の概要を示し、最も有力なデュピュイの解釈を参照する。そこで見えてくる寓話の特徴と、その上で分析が必要になる論点を整理する。

### (1) アレンジされた寓話

アンダースの寓話はいくつかのバリエーションがあるが、ここでは「哀悼される未来」と題された話を採用する。通常の寓話では、ノアは洪水が起きるお告げを神から授かり、何度も人々に告知せようと奔走するが、警告が聞き取られることはない。その後、洪水が発生し、大勢が流されてしまうのが一般的な展開である。アンダースは「ノアの方舟」をモチーフに、寓話で描かれる世界の破局をアレンジしながら用いている。

アンダースの描くノアも同じように、予言を告げられたことを知らせても信じてもらうことができなかった。しかし、アンダースは、忍耐強く訴えても聞き届けられないことを、神に対して不満を漏らすノアを描く。着目したいのは、聴衆にノアの予言が聞き取られない状況が変化し、届く瞬間を描く点である。そこで状況を打破すべく、ノアが取った手法

は「葬儀の所作」を活用することだった。

まもなく通りに出ると、言った通りやりだした。民衆の慣習に逆らい、神の聖なる言葉をひどく傷つけるような役を演じた。突然首をすくめて打ちのめされた者のように横たわったが、それだけではなかった、——親族の死後に着る喪服である袋をまとして灰をかぶり、辛い別れを表すという、葬儀以外では見られず誰も思いつきそうもないことをやったのである。  
(Anders 1972: 3=2016: 11)

ここでノアが取った行動は、未来の津波の被害者を先んじて哀悼する葬儀を行うことである。後述するように、未来に行われるはず儀式を先取りすることで、「逆転された未来」を示す点が特徴である。このノアの奇抜な行為は、それまで彼を嘲笑っていた聴衆の心を揺さぶり、ノアの言葉（予言）に関心を向けさせる。哀悼の祈りを捧げるノアの儀式的実践は、予言された出来事の運命に周囲を巻き込んでいく<sup>2)</sup>。その結果、一人また一人とノアの手伝いをする者が現れる。みな口々に「間違っていたことになりましたように」と言いながら、予言を受け入れ、それぞれの行動に移る。

まだ起こってもいないカストロフを伝えるために、このような大げさな芝居を打つノアの姿は、アンダース自身の戦略の一つともいえる。前節で触れたように、アンダースが対峙する問題には「落差」があり、その差を認識し、近づけるために「誇張 (Übertreibung)」を用いることが特徴である。つまり、「ぜひとも先鋭にしたり拡大したりしなければならず、変形させなければ認められず、見えてこないために、どうしても変形させなければならないような現象、肉眼では見えない現象が存在するからこそ、われわれは、「誇張するか認識を断念するか」という選択を迫られるのだ」(Anders 1985: 15=1994上: 16)。こうした強い断言を踏まえると、アンダースがこの寓話でノアをおかしく描写した狙いも理解できる。誇張や変形を通じて、見えにくいものを見やすくする操作である。寓話の最後では、多くを救うノアの芝居について次のようにまとめる。

ノアが喜劇を演じ、袋をまとい灰をかぶって登場し、時間を逆転させて、前もって涙を流し、

まだ生きている人々とまだ生まれていない人々のために、死者のための祈りをするだけの勇気を奮い起していなかったら、——方舟が造れなかったところか、堂々たる船団をつくることはできず、やっと出来た一隻の貧弱な方舟さえ造れなかっただろうし、ノアの末裔であるわたしたちも存在していないだろう。(Anders 1972 : 10=2016 : 21)

ノア自身の「誇張」は「時間を逆転」させ、周囲に行動を促した。これがアンダースによって付け加えられた結末である<sup>3)</sup>。この寓話で描かれる状況は、まさにアンダースが格闘していた「アポカリプス不感症」の問題——すなわち、カタストロフ的な予言が聞き入れない現実——を象徴している。そして、それは未来を捉えるように促す実践(予言)が抱える問題であり、その糸口として提示されるのが、ノアの「時間を逆転」させる芝居である。

本稿では、この後も寓話の特徴に何度か立ち戻りつつ、「伝わらなさ」をどう乗り越えうるのかを考察していく。その前に、アンダースを有名にしたデュビュイの議論を参照することでこの寓話の意義を確認し、その上での課題を示すことにしよう。

## (2) 予言の解釈——デュビュイの「時間のループ」化論

アンダースの寓話を分析する上で、デュビュイの解釈を避けることはできないだろう。理由は単にデュビュイがアンダースを再発掘したというだけではない。アンダースの議論を深く理解し、その戦略である「誇張」の特質を的確に捉えているからである。

デュビュイは核の問題から、環境問題や経済危機といった様々な破局に警鐘を鳴らしつつ、その中心には「プロメテウスの落差」の問題を据えており、アンダースが対峙した問題、本稿が焦点を当てた社会科学の論点とも重なる。デュビュイは通常の寓話でノアが行うように危機を知らせることで不十分だと考える。「知るだけでは、その知識を受け入れ、結果として行動にいたるには不十分なのである。この基本的な真理を、予防原則を唱える人々はこれまでずっと理解してこなかった」(Dupuy 2005 : 11=2011 : 5)。

この「予防原則」とは従来のリスク論の発想であ

り、デュビュイの批判はそれが採用する時間の考え方である。リスク論が採る発想は「歴史の時間」と呼ばれ、現在の視点から未来を計算・予測し、リスクを回避できると考える、私たちに馴染み深い発想である。その特徴は、渡名喜庸哲(2015)が指摘するように、「信じることよりも計算することが重要になる」(渡名喜 2015 : 55-56)。しかし、この発想では破局の未来を回避可能なものとして考え、それゆえに起こりえないものとして認識されがちである(だが、それでも実際には「想定外」として厄災は起きてしまう)。

これに対し、デュビュイは破局の予言が聴き取られない「悲劇」の描写と、そこからの「巧みな脱出方法」を示す例として、アンダースの「時間の逆転」を参照する。そこで提唱される「投企の時間」は、破局が不可避であることを前提し、未来がループする形で現在を見直す視点である。彼は、最終的な破局を運命(必然)と認識しつつ、同時に私たちが過去から未来へと続く道中にいると捉えるように促す。つまり、この破局において「私たちに起きることの唯一の原因は自分自身なのだ」ということは念頭に置きながらも、私たちがあたかもその犠牲者であるかのようにみなすことに尽きる」(Dupuy 2005 : 100=2011 : 116)。

デュビュイはこれを「覚醒した破局論」と呼び、未来を計算可能な要素として捉えるリスク論的発想を越えようとする。未来を計算可能なリスクで序列的に測る限り、その価値は人間的な尺度に収まり、聖なるものとしての価値=危機感を失ってしまい、計算可能な小さな破局なら起きても大丈夫だと高を括ることになる。対するデュビュイはアンダースの寓話を、「時間を逆転」させ破局が避けられない地点から警鐘を鳴らすものと捉え、私たちは破局に足を踏み入れていると訴える(誇張する)。破局の起こっていない現在から未来の出来事を序列付けし「これから起きる」と予言を語るのではなく、「洪水は起きてしまっていたらう」という前未来的な地点から考えるように促す。

その上でデュビュイは、「破局的な出来事はもちろん運命として未来に刻まれている。だが、偶発的な事故(accident contingent)としても刻まれている」ため、「偶然と運命とが混淆する」(Dupuy 2005 : 19-20=2011 : 15) 点を見極める必要性を訴える。つまり運命的なカタストロフへ至る途上には、

「偶発的な事故」が絡み合っているのだ。それゆえ、彼にとって重要なのはその「アクシデント」を防ぐこと、カストロフは可能性をゼロにできない運命であるが、その蓋然性は下げられるものだと思えることである。このアクシデントは、しばしば小さく、他の事象に関係するかわかり難いため、人々もそれを被っているのか把握できない。そのため、デュピュイの議論は、小さく見えるアクシデントを回避するように告知知らせることになる。

しかし、破局が避けられず、それを構成する小さなアクシデントを告知知らせるとき、どのようにして人々の信に入り込むことができるのだろうか。単にそのまま告知知らせるなら、「その現実的意義は一見すると「歴史の時間」とあまり差異はないようにも」(檜垣 2022 : 16) 見え、それがもつ実践的意義は「きわめて凡庸なものにならざるをえない」(渡名喜 2015 : 95) だろう<sup>4)</sup>。また、それだけでは、先にみた「社会課題」が受け取れない難点と近いところに帰着しかねない。ならば、リスク論と混同されることを避けながら、いかにアクシデントとその未来を把握し、伝えるのか。しかも、実現しないように注意しながら、語る側はどのように表現すればよいのか。この点を考察し、強調するためにはデュピュイを離れなければならない。そこで、同じく未来を捉え、新たに到来させる方途を探るドゥルーズの議論へ移動しよう。

### 第3節 ドゥルーズにおける未来への関心

本節では、ドゥルーズにとって未来がどのような位置を持ち、どう捉えようとしていたのかを確認する。いささか遠回りをしてきたが、「伝わらなさ」の問題を共有しつつも、それを乗り越えようとするアンダースの寓話は、多くの示唆を与えてくれる。しかし、単に知らせるのではないとしたらどう振る舞い、表現するのか。寓話をより深く分析し、教育への示唆を得るための手がかりとして、ドゥルーズの議論を参照する。

#### (1) ドゥルーズにおける「未来」の位置

ドゥルーズは差異の哲学を論じたことで知られるが、前期の著作『差異と反復』や『意味の論理学』から後期の『シネマ』に至るまで時間論が通底しており、「現在」とそれを支える「過去」や「未来」

が論じられている。例えば『差異と反復』で「未来」は、私たちが経験する「現在」(=「生ける現在」)、その現在を支える「過去」(=「純粋過去」)を駆動させる条件として論じられる。しかし、私たちは習慣が形成されること(「差異を抜き取る」)(Deleuze 1968 : 104=2007上 : 207)とも呼ばれる)によって安定した世界で生きているため、「現在」という時刻に囚われがちである。このように、現在に限定される私たちは、その視点からしか過去や未来を捉えられず、視野に収まりきらない出来事を掴み損ねてしまう。

これに対して未来は、「永遠回帰」と重ねられて論じられる。「永遠回帰が本質的に未来と関係しているのは、未来が、多様なものの、異なるものの、偶発的なものの、それら自身のためのかつ「その都度の」展開であり、繰り広げであるからだ」(Deleuze 1968 : 152=2007上 : 311)。ここで未来は、一度限りの究極的な差異の到来として捉えられ、「死の本能」とも関連付けられる重要な時間概念として登場する<sup>5)</sup>。「永遠回帰」や「死の本能」と重ねられる「未来」とは、それ自身、無限に引きつづく順序性という超越的な事態を、現在＝同には依拠しない別種の反復として、つまりは「絶対的に」「他」なるものを導き入れる反復として指定」(檜垣 2010 : 45)されている。また『意味の論理学』でも、未来は過去とともに「アイオーン」(永遠性)として扱われ、現在を指す「クロノス」と対比される。ここでも限定される時間であるクロノスに対して、アイオーンは限定されることのない時間として位置づけられ、現在を超出するものとして重要視されている(Deleuze 1969 : 77-78=2007上 : 118-119)。このように、現在に亀裂を入れるかのように到来する未来は、「差異」を論じるドゥルーズにとって重要な役割を担っている。

ここで重要なのは、未来は究極的な差異の到来であり、「現在」(および過去)を支える条件でありながら、「現在」には限定されない力を持っている。そのため、未来の到来は同一性を解体してしまうほどの力であり、極端な捉え方を許すならば、「現在」を生きる私たちにとっては死へと接近することにはほかならない。また、その性質上、直接的には経験することができないため、ドゥルーズにとって未来は経験的には捉え難いものとなる。この点で、ドゥルーズにとっても、教材としての「社会課題」やア

ンダース／デュビュイの破局と同様に、未来の出来事を上手く捉えることは難しいように思われる。

しかし、「未来」が絶対的な差異の到来である以上、捉え難いとして捨て置くことはできない。後述するようにドゥルーズが問うていたのは、死という経験不能な出来事そのもの（つまり死んでしまうこと）を経験することではない。そうではなく、経験的には捉えることが難しい未来を、いかに把握するか、それが彼の問題関心の一つであった。

## (2) 未来を垣間見るための技法

では、「差異」を導き入れる未来、現在の中で捉えたい時間の到来を、いかに把握することができるのか。すでに見たように、私たちは「現在」を生きる中で「差異」を抜き取る形で過ごすため、未来を十分に把握できない。そこで手掛かりとなるのが「前未来形」の時制であり、この点で前節までの議論とも交差する。

アンダースの寓話における予言の特徴は「前未来形」で語られる点にあった。ドゥルーズは『意味の論理学』の22セリー「磁器と火山」でこの特徴について、アンダースを参照してわずかに言及している。そこでは、人が経験する〈亀裂 (fêlure)〉という出来事を取り上げる。すでに指摘したように、この〈亀裂〉は未来の時間形式に関わる原理「死の本能」とも関わりを持つ<sup>6)</sup>。「死の本能として理解される時間形式と本質的に関連している私の〈亀裂〉というテーマについては、三つの偉大な、しかしたいへん異なる文学作品が想起されるであろう」(Deleuze 1968 : 118=2007 : 458)。ここで指名されている作家とは、ゾラ、フィッツジェラルド、ラウリーであり、それらが描く〈亀裂〉の経験は限定的な現在を外れた時間（未来）とさしあたり整理できる。とはいえ、その契機がもたらす経験は、未来と結びつく以上、捉え難く、しばしば死に接近しかねない危険な経験を想起させる。しかし、ドゥルーズは、実際の危機的経験へ陥ることをギリギリで回避しつつ、それでもなお接近することで未来を垣間見る方法を模索する (Deleuze 1969 : 183=2007上 : 272-273)。その技法として考察されるのが、アルコールの酩酊がもたらす状態あるいは主義、「アルコール主義」である。

ただし、ここでアルコールに酔うことや命の危険を推奨しているわけではない。ここで重要なのはそ

の「効果」であり、「同時に二つの時間 (temps) に生き、同時に二つの契機 (moments) に生きること」(Deleuze 1969 : 184=2007上 : 274) である。つまり、現在において別の時間を生きているかのような効果であり、「可能化された主体の意識、通常では経験不可能な時間意識の体験と観察を行うものとしての時間の変容」(小谷 2021 : 6) に触れることである。

ドゥルーズは、フィッツジェラルドの『崩壊』に多くの記述を割きつつも、僅かにラウリーの『火山の下』から未来に関与する技法のインスピレーションを引き出す。フィッツジェラルドの作品が現在を過去のように生きるのに対し、ラウリーの作品は未来へと接続する。そして、その特徴は前未来的な時間の効果であり、その特徴を考察した人物としてアンダース (シュテルン) の名を挙げる<sup>7)</sup>。「極めて興味深い論文で、ギュンター・スタイン [原文ママ] は、前未来の特徴を分析した。複合された過去 (passé composé) と同じく繰り延ばされた来る未来 (avenir prolongé) は、人間に属しなくなる」(Deleuze 1969 : 186-187=2007上 : 282)。これだけでは明らかに言葉足らずであろうが、すでに見た議論を踏まえれば、さしあたり次のように解釈できるだろう。すなわち、限られた現在に生きる人間は自らの限定的尺度で単純未来的に捉えがちだが、変形された未来はその慣れ親しんだ範疇を外れる。そのため把握しがいなものとなる。

そうしたなかで「アルコール主義」によって「来る未来 (avenir) の全てが前未来 (futur-antérieur) として生きられてしまう。そしてこの複合された未来 (futur composé) は、恐ろしいほどに加速し、死に至る効果のいち効果を生み出すのである」(Deleuze 1969 : 186=2007上 : 277) と述べる。つまり、未来を通常の経験的な仕方では捉えることができない私たちが、その未来をあたかも生きてしまうという効果を持つ。だからこそ、この特殊な技法「アルコール主義」を頼るのだが、未知なる出来事としての未来を捉えることは、いわば未来を幻影において経験する。「ゆえに我々の生において、経験可能な〈未来〉が生じることのできる唯一の場は幻影であり、そのような不確かな様態を伴ってしか、全き新しさ、そして未知なるものが姿を表すことはできない」(小谷 2021 : 12) のだ。

ここまでの議論を整理しよう。アンダースが格闘

し、デュビュイも問題に据えたように、現在を生きる私たちにとっては、未来は重要だが捉えがたく、受け入れることは困難であった。この点についてドゥルーズも直接の接点こそないものの、問題構成を共有する。「アルコリスム」という技法は、そんな未来を「前未来」として生きてしまうこととして描く。そして、「アルコリスム」的に生きる者は未来を幻視するのである。では、その未来を幻視した予言者は、どのような振る舞いを表現するのか。最後にこのことに関わるドゥルーズの考察と、それをもとに寓話のある場面の解釈を行おう。

#### 第4節 寓話のひと場面：ノアの変貌と聴衆の眩暈

通常では経験しえない「前未来」を生きることは、現在の生を歪める経験への接近でもあり、極めて捉えがたい。しかし、「アルコリスム」の議論で確認したように、ドゥルーズは実際に死んでしまうと、物質的な身体の帰結に繋がる経験として実現しないように気を付けつつ、その未来を扱おうとしていた。この観点に立つと、未来を「伝えること」、すなわち見えるように表現すること自体も異なる様相を帯びることになる。

その際にドゥルーズが強調するのは、「自己自身の出来事の喜劇役者になること、反一実現（*contre-effectuation*）」（Deleuze 1969：176=2007上：262）である。それは、実際には物質的に限定された現在の位相にさしあたり立ちながら、異なる位相を演じるのだ<sup>8)</sup>。つまり「役者は瞬間に留まるが、役者が演ずる人物は、未来の中で希望したり恐怖したり、過去の中で思い出したり後悔したりする。この意味において、役者は表象する」（Deleuze 1969：172=2007上：256）。このように、役者は現実在即しながらも、その実現とは異なる上演を通じて未来を見せるのだ。

したがって、役者は出来事を実現するのだが、出来事が事物の深層で実現されるのとはまったく別の方式によってである。あるいはむしろ、役者はこの宇宙的で物理的な実現に対して、別の特異な仕方でも表面的な実現によって、その分だけ明確で鋭利で純粋な実現によって裏地を張るのである。（Deleuze 1969：176=2007上：262）

未来を幻視した者は、それを出来事として実現する。しかしそれは、物質的な経験としてではなく、役者による表現として出来事を上演するのである。そのため、未来へと一人だけ進んでしまった者は、他の者から見ると狂ったかのように、突飛な主張をしているかのように思われることがある。寓話におけるノアが表現したのは、「洪水の後の悲しみ」という出来事であり、その出来事を自身のものとして示したのである。そのため、民衆が知っていたような「幸せなノア」とは異なり、「別人かのようなノア」として周囲に捉えられていた。しかし、重要なのは彼が「喜劇役者 *Komödianten*」（Anders 1972：2=2016：11）として振舞った点である。

反一実現だけを操作して、到来することがありえたかもしれないことに値すると主張するとき、それは道化師（*bouffon*）の反一実現である。しかし、実際に到来することのバントマイム師（*mime*）であること、実現に反一実現の裏地を張ること、真の役者やダンサーのような隔たりの同定、これこそが出来事の真理に対して、出来事の不可避的な実現と混じり合わない唯一無比のチャンスを与え、裂け目に対して、各身体の折れる音で立ち止まらずに、非物体的表面の場の上空を飛行するチャンスを与え、我々に対しては信じられなかったほど遠くに行くチャンスを与える。（Deleuze 1969：188=2007上：280）

ドゥルーズの語る「反一実現」に携わる役者の整理で、対比的に描かれる「道化師」と「バントマイム師」の違いは重要である。私たちは現実に起きていない出来事を伝えるとき、それが「ありえたかもしれない」という予測する立ち位置から語ることがある。そうではなく、あたかも未来の位置から「実際に到来すること」として語ること。そしてそれは、自らの出来事として語るということが、上演において重要なのである。「本当に知らないのか。明日起こったのだよ」（Anders 1972：6=2016：15）。このように自分の未来をあたかも生きているように全力で振る舞うことを通して、ノアは取り囲む聴衆にも未来を垣間見せる。前未来的な予言は「現在の位相に未来を重ねる」という特徴だけではなく、語る者自身が「実際に到来すること」として生きること（上演すること）が必要であることが分かる。当初、ノ

アの予言は神から授かったものとして伝えたが、それでは人々に伝わらなかった。不幸の予言が引き付けられたのは、(未来の姿を重ね合わせた)ノア自身の予言・言葉だったからではないだろうか。

また、ノアはその不幸の予言を、「実際に到来すること」として語ったが、加えてその際に葬儀という慣習的な制度(きまり)を流用したことが重要である。それは、未来を生きるための「舞台」をその場に出現させる工夫であった。この工夫によって、破局の未来をそのまま実現させることなく、フィクショナルな形式として出現させる。また、人々が全く知らないものを実現させるのではなく、知っているものをアレンジして表現することで、「落差」を浮かび上がらせながら上演するのである。そのため、詠唱(カディッシュ)の儀式に突入すると、少なからず信仰を持っていた聴衆は戸惑いながらもノアの劇場に引き込まれた。

場違いな所で、時ならぬときに、偽りの人々のためにカディッシュを唱えることがいかに冒瀆的なことであろうと、——神自身が定められた慣習をこのように冒瀆することが神の同意なしに許されるとは考えられないと思う人々がいたし、自分たちは祈りに引き込まれているのだから、本当にまだ生きている者なのか、それともすでに死んだ者なのかもう分からなくなった人々もあり、いったん始まった祈りを中断するのはさらなる冒瀆だっただろうし、あの五人もそういう恐ろしい罪の償いを想定した規則を知るよしもなかった——こういう理由でノアに声をかけたり、祈りを最後の言葉まで唱えるのを止めさせようとする者はいなかった。(Anders 1972 : 8-9=2016 : 18-19)

この葬儀という舞台装置は、多くの人にとって認識しやすい既存の慣習であり、認識的にも感覚的にもすでにある程度の馴染みのある装置である。ノアの方法は、同じように見えている葬儀を別様に用いることで、信仰を逆手にとる。そして、既知であり、身体化している舞台装置に少しだけ異なるもの(未来の犠牲者を祈ること)を挿入する。知として捉えるだけでなく、感覚的に身体化しているものであるからこそ、そこに異なるものが割り込むと、受容はしつつも齟齬を感覚する。こうして、同じように見え

る世界を変化させる契機を招来した。それは、よく知られていた者が見せる「変貌した役者としての新たな姿」であり、見えにくかったが確かに実存する微細なものを「誇張」して表現するのだ。

では、なぜ前未来形の予言や舞台装置の流用がカタストロフを知らせ、信じさせることに繋がったのか。それは、舞台装置が既知の経験を捉えながら、前未来的予言が現在の認識と感覚を二重化するからだと思われる。とりわけ、二重化されることによって生じる齟齬は、まずもって感覚的な次元で働く。実際に、上記の引用が示すように、民衆は理性的な整理は追いつかないものの、感覚的には違和感を看取している。そして儀式が徐々に進むにつれて、人々は考え信じ、ノアに協力することになった。このことは、感覚の齟齬を出発点に、当初は知りえなかったものを知り、信じる(理解する)ということを示しているのではないだろうか<sup>9)</sup>。ドゥルーズの議論を手掛かりにアンダースの寓話を見直すならば、豊かな技法が垣間見えるのである。

## おわりに

本稿では、「社会課題」に対して生徒が主体的にそれへと向き合うことが求められる一方で、受け止めることの困難性とそれへの応答を考察してきた。その手掛かりとしてアンダース、デュビュイ、ドゥルーズの議論を参照しながら、特に「伝わらなさ」という問題に対して、どのように応答するかを問い、その課題を乗り越えるための示唆を求めてきた。

まず、アンダースの寓話とそれへのデュビュイの解釈に着目し、社会科の困難と「未来の破局」を伝える際に起こる「伝わらなさ」の問題が重なる点を整理し、寓話で描かれた「時間のループ」化に特徴があることを確認した。この点をデュビュイは強調し、未来が既に確定しているかのように提示することで、現在において小さなアクシデントを避けることを促す試みとして解釈していた。しかしながら、告知知らせる点では、既存の表現方法と混同されかねない恐れが残り、どのように「信じること」への変換を達成するかという課題が残されていた。

そこで、ドゥルーズの議論を通じてノアの狂気的な振る舞いが「信じること」へ誘う方途とメカニズムを探った。ドゥルーズにおいても「未来」とは、経験的な現在では捉え難い差異そのものであり、

「アルコリズム」の技法はそうした未来を幻視する技であった。アンダースとドゥルーズはこの前未来的な時間の力に着目する点で交差するのである。そして、幻視する者は未来を把握し、あたかも自らに到来するように振舞うことで「未来の出来事」を演じ現実を揺さぶる。彼らは既存の「理性」の地点から眺めることでは取り零すものを拾うべく、理性の埒外にも僅かに踏み出すのである。そして、その幻視者を見る者もまた、世界が少しずつ変化し、微細な違いが浮かび上がってくる。ノアの寓話にはそのような場面が再確認でき、この技法が人々を「信じる」ことへ引き入れたのである。

これらの議論が示唆するのは、「社会課題」を単なる情報として伝えるのではなく自身の出来事として表現する教育者の姿である。翻って制度としての学校教育において、教材として「社会課題」を取り上げるとき、教師は予報的に振舞っていないだろうか。教科書や教師の言葉が単に「知識」として消費されるのではなく、「実感」として共有されるには、「誇張」や「演技」にも見えてしまう表現が必要になるかもしれない。それは、伝えることにおいて近代教育が削ぎ落したものに再接近するように見えるだろう。もちろん、根拠のない妄言や無責任な誇張が許されるわけではないし、本稿もそのようなことに賛同するものではない。ここで強調したいのは、その「誇張」に至るまでに十分な検討を重ね、「社会課題」としての正当性を確保しつつ、自らにおいて表現することである。

社会科教育における「伝わらなさ」を乗り越えるためには、教育者がその課題の中でどう位置付けているかを語り示し、教育者自身が「未来」をあたかも生きているかのように表現する必要がある。それは、未来が既に到来しているかのように振る舞い、その「狂気」をあえてまといながら、学習者を巻き込む挑発的な試みである。本稿が示したのは、新たな実践を創出するというよりも、その手前で重視すべきパースペクティブ、既存の実践へも照らし返すような視点である。

とはいえ課題も残る。本稿はあくまでもスケッチに留まり、具体的な教育実践へは踏み込めていない。加えて、実践の場で伝える出来事が一定の価値性を帯びることは十分にありえる。その際に、「中立性」などの制約が意識的に働き、自らを表明せず、教育者が後景に退きかねない状況も考えられる。そ

うした中で教育者はどう立ち回ればよいだろうか。また、今回の手掛かりにした哲学者らの思想にも十分には分け入ることはできていない。アンダースだけでなく、ドゥルーズもまた寓話や文学からインスピレーションを得ている。それらの作品がどのように人間の想像力に関与するのか。より深く入り込むことで、先の課題にも進展をもたらし得るだろうか。それら含めて今後の課題である。

## 【付記】

本研究はJSPS 特別研究員奨励費（課題番号：24KJ0754）の助成を受けたものである。

## 註

- 1) こうしたアンダースの視線の先には、〈不安としての子ども〉が捉えられており、この姿は既存の教育学が持つ方向性の切り離せないネガとして重要な論点をもたらすだろう。アンダースのパースペクティブについては、山名（2017）の研究を参照。
- 2) この寓話の中で次のように描かれる。「ところがいまや——その格好をみるとみな同じ意見だったが——どう見ても誰かが亡くなったに違いない、それも多くの血族の誰かではなくて、かれ自身の家族の誰かに違いない。だって頭から灰をかぶっているが、そんなことは息子を亡くしたか愛する妻を亡くした者にしか許されず、そういう者だけがなすべきことだからだ、というのが皆の意見だった。」（Anders 1972：3=2016：12）
- 3) ただし、誇張することは危険を冒すことでもある。この点をアンダース自身も、気が付いていた（Anders 1985：19=1994上：20）。それゆえ、本文でも言及するように、本稿は根拠のない「妄言」を単に放つことを推奨するものではない。語る前に十分に考え抜くことが前提であるし、それは現代の諸科学の助けを借りたうえでの「誇張」であらねばならない。
- 4) もちろん、近似して見えるからと言って、デュビュイの議論がリスク論と同じ土俵に立つのではない点は忘れてはならない。しかし、彼の次の表明はそうに受け取られる恐れを残している。「われわれに目覚めて見張るように促すために、わたしが言うところの賢明な破局論は、思考によって破局の後の時間に自己を投影し、われわれの現在の方向を後ろ向きに見つめ、破局を運命、ただし、まだその時に至っていないうちは避けることを選

びうる運命として理解することにあるのだ」(Dupuy 2010: 46=2014: 51)。

5) ドゥルーズの時間論における二つの概念について整理しておこう。ドゥルーズは「死の本能」を生物学的な死ではなく、通常的时间軸から外れた超越論的原理である「空虚な形式」として捉える。この時間の蝶番を外れていく原理によって、出来事は同一の時間として繰り返されるのではなく、常に新たなものが到来する。「永遠回帰」とは、この原理によって、同じものの単純な繰り返しではなく、異なるものが絶えず生じる反復である。ドゥルーズは、フロイトとニーチェの議論を、新たなものが生じ続ける反復として読み解いている (cf. Deleuze 1968: 146f=2007上: 300f)。

6) 小谷弥生の議論によれば「極めて隠喩的な概念」として両者は提示されており、本文で続けて引用した僅かな脚注に目を向けるように小谷は促す (小谷 2021: 3)。その上で本稿も小谷の徴候的な読みが示す「アルコリスム」という概念を手掛かりとする。小谷の指摘の通り、この概念は「アルコール中毒」として理解するよりも、1つのイズムとして参照することに意義がある。

7) ここでのドゥルーズによる言及では、誤ってSternの表記をSteinと書いている。そのため、本文での引用は原文に沿って記述した。また、本稿ではドゥルーズがアンダースの前未来の議論に示唆を受けていたという事実の確認に留まるが、アンダースの議論については別で丁寧な読解が必要である。

8) このcontre-effectuation概念はしばしばその接頭辞を「反」として訳され、実現することに抗うものとして文字通り理解されてきた。しかし、平田公威の指摘にあるように、『意味の論理学』においては事情が異なる。本稿は従来の訳に倣いつつも、〈これまでのような実現とは別の仕方で実現する〉というニュアンスを込める。

9) 知らなかったことを思考する契機を、教育学者のセメツキーは、「ドゥルーズが言うように、[……] 表象ではなく情動的な、特異な経験からの学び」(Semetsky 2009: 450) にみる。このことは、「学習のパラドックス」に対する応答と関わるが詳細な分析は別稿に期したい。

## 参考文献

アンダースやデュビュイ、ドゥルーズからの引用は、強調などは特に断りが無い限り原文によるものだが、既訳に倣いつつも本稿の文脈に合わせて変更している箇所がある。

Anders, G., (1985=1956) *Die Antiquiertheit des Menschen*,

*Bd1: Über die Seele im Zeitalter der zweiten industriellen Revolution*, C. H. Beck. (青木隆嘉訳 (1994) 『時代おくれの人間 (上): 第二次産業革命時代における人間の魂』法政大学出版局。)

———, (1972) *Die beweinte Zukunft* (1961), Ders., *Endzeit und Zeitende: Gedanken über die atomare Situation*, C. H. Beck, S.1-10. (青木隆嘉訳 (2016) 「哀悼される未来」(一九六一年)『核の脅威: 原子力時代についての徹底的考察』法政大学出版局、9-21頁。)

Deleuze, G., (1968) *Différence et répétition*, PUF. (財津理訳『差異と反復』(上下) 河出書房新社、2007年。)

———, (1969) *Logique du Sens*, Minuit. (小泉義之訳 (2007) 『意味の論理学』(上下) 河出書房新社。)

Dupuy, J-P., (2005) *petite métaphysique des tsunamis*, seuil. (嶋崎正樹訳 (2011) 『ツナミの小形而上学』岩波書店。)

———, (2010) *La Marque du sacré*, Flammarion. (西谷修・森元庸介・渡名喜庸哲訳 (2014) 『聖なるものの刻印 科学的合理性はなぜ盲目なのか』以文社。)

Figuier, R., & Mongin, O. (2003). Pourquoi lire Günther Anders aujourd'hui? Le XX<sup>e</sup> siècle. *Auschwitz, Hiroshima et la Kolyma. Esprit*, 294 (5), pp123-126.

Semetsky, I. (2009). Deleuze as a Philosopher of Education: Affective Knowledge/Effective Learning. *The European Legacy*, 14(4), pp443-456.

大澤克美 (2011) 「第三部 聞き取り調査から」『学藝社会(27)』、41-50頁。

小谷弥生 (2021) 「前期ドゥルーズの< アルコリスム > の時間論的意義について: ゼラ、フィッツジェラルド、ラウリーとともに」『共生学ジャーナル』(5)、1-21頁。

渡名喜庸哲 (2013) 「フランスにおけるギュンター・アンダース」『国際哲学研究』(2)、167-170頁。

——— (2015) 「J=P・デュビュイとカタストロフ論的転回」渡名喜庸哲・森元庸介編『カタストロフからの哲学 ジャン=ピエール・デュビュイをめぐる』以文社、41-100頁。

——— (2016) 「ギュンター・アンダースのヒロシマ: 政治でも、道徳でも、ヒューマニズムでもなく」『現代思想』44(5)、青土社、96-108頁。

楢垣立哉 (2010) 『瞬間と永遠』岩波書店。

——— (2022) 「破局とコンヴィヴィアリティ: ジャン=ピエール・デュビュイをめぐる」『思想』(1176)、岩波書店、6-24頁。

平田公威 (2019) 「出来事は必ずや実現される: 『意味の論理学』におけるcontre-effectuation概念再考」『フランス

哲学・思想研究』(24)、191-202頁。

宮本英征(2024)「日本における社会科教育研究の動向(2023年度)」日本社会科教育学会編『社会科教育研究』(152)、94-105頁。

山名淳(2017)「広島のアンドースー哲学者の思考に内在する文化的記憶論と〈不安の子ども〉」『災害と厄災の記憶を伝えるー教育学は何ができるのかー』勁草書房、120-147頁。

和田悠(2023)「自覚的な「客分」を育む主権者教育の方へ：新教科「公共」の性格をめぐる覚書」『現代思想』51(4)、青土社、88-97頁。